

石井忠雄作 「芋をもらえなかった少女」

< 前編 >

- 遠山ルツ子 いらっしゃい、民子さん。今日はよいお天気ね。先週礼拝に見えなかったけど、お加減でも悪かったのですか？
- 古川民子 いえ、ちょっと、親せきで婚礼があって出かけたもんですから。でも1回でも礼拝を休むと落ち着かなくてねえ。先生に申し訳ないって主人とも話していたんですよ。
- ルツ子 裕造さん、今日の午後、役員会があるのをご存じかしら。
- 民子 はい、昨日、書記の与作さんから連絡をもらったものですから。
- ルツ子 今日は、来月行われる伝道集会の相談があるのですよ。ああ、もうじき礼拝が始まりますね。中に入りましょう。
- (音楽) (賛美歌のオルガン演奏)
- 遠山牧夫牧師 今日は、神様の赦しについてお話ししましょう。罪を犯して、神様に背いているわたしたちのために、神様は貴い一人子であられるみ子イエス様を十字架につけ、我らの身代わりとしてくださいました。神様の赦しは、人間に価値があるからではなく、わたしたちが、無価値で、恩知らずで、反逆者であるにもかかわらず、一方的に与えられているのです。それはなぜでしょうか？ 神様が“愛”であられるからです。(FO)
- 遠山忍ナレーション わたしは遠山忍と申します。あれは1939年(昭和14年)の初めごろ、わたしは10歳でした。わたしの父、遠山牧夫と母のルツ子は、栃木県の農村にある小さな教会で伝道していました。そのころは、中国大陸への日本の侵略が始まり、出征兵士の壮行会があちこちで行われていましたが、わたしのいた村はまだ比較的平和で、父の教会には村の人々が集い、とてもにぎやかでした。
- 古川裕造 忍ちゃん、相変わらずかわいいね。墨子さんのお嬢さんだけに、優しくて。大きくなったら息子のお嫁さんになっておくれよ。
- 忍 イヤだ、おじさん。いつもわたしをからかってばかり。
- 裕造 いやいや、そんなことはないよ。忍ちゃんはその気なら。ねえ、母さん。
- 民子 そうですよ。うちの和夫は今東京の警視庁の警察官をしているんだよ。将来はこちらに帰ってきて町の警察署の署長になるのが夢でね。
- ナレーション そう言ったのは、教会の役員をしていた、古川裕造さんと奥さんの民子さんでした。村の裕福な地主で、父母も何かと頼りにしていました。
- 裕造 ほう、しまった。役員会だ、役員会！  
(役員会の席上)

遠山牧師 この前の伝道会は、皆さん、頑張ってください、82歳になるヨシさんを始め、多くの方がイエス様を信じました。とても素晴らしいことです。来月の伝道会も、ぜひ頑張ってくださいと思います。

裕造 さあて、予算のことだけど、今度もみんなに協力してもらわなければね。特に鈴木さん。あなた、この前はあまり協力しなかったんだから、今回は頑張ってくださいよ。

鈴木博 申し訳ありませんが、今、わたしら事業に失敗して、家内の親せきを頼ってここに越してきたんです。今は食べるのに精一杯で…。ですからもう少し待ってください。

ナレーション そう言ったのは、つい3か月前、東京から越してきた鈴木博さんでした。

裕造 大変なのはお互い様ですよ。みんながやる時には、少しは犠牲を払ってもらわなければ。あなただけ例外ってわけにはいかないですよ。なあ、みんな。

鈴木 でもお宅は、大地主で豊かだから。

裕造 そんな問題じゃないでしょう、鈴木さん。わたしら、教会にお世話になっているんだ。みんなで力を合わせなければ。

遠山牧師 まあまあ、裕造さん、そんなこと言わないで。鈴木さんは、今、奥さんが入院中で大変なんです。でもこの前のチラシを作られたのは鈴木さんなのですよ。伝道会に間に合わせようと、息子さんと夜遅くまでかかって作られたのです。お互いが、自分の持っているものでイエス様に仕えることはとても大切なことなんです。

裕造 先生は、いつも東京者の肩を持つんだから。わたしら、前任の加藤先生の時から、みんなで力を合わせて教会を守ってきたんだ。加藤先生は、何事も平等で例外は作らないっていう方針でしたからね。それを、“教会のために協力しないでいい”なんて風習を作ってくれちゃ困りますよ。

ナレーション 古川さんの強い口調に、父も黙ってしまいました。古川さんは教会でも長老格で、かなりの影響力を持っているようでした。

(音楽) (不安で重苦しい感じ)

ナレーション 中国大陸での戦争が広がり、次第に長引いてくると同時に、国は1939年(昭和14年)に、宗教を統御する目的で、「宗教団体法」という法律を作り、翌年から実施しました。この法律によって、教会の数が50、信徒数が5,000人以上いない団体は、宗教団体とは認めないことになりました。認められない教会が礼拝を行えば、それは非合法団体として解散を命じられ、従わなければ逮捕、投獄されるのです。そこで、多くの教会・教派が集まって、1941年(昭和16年)教団を作り、それに加盟しました。この教団が政府によって認可されたのは、その年の11月24日。時あたかも太平洋戦争の勃発する2週間前の事でした。しかしわたしの父は教団に入ることに反対し、教会では、この件で役員会が行われ

ていました。

(教会の役員会)

裕造 遠山先生、どうして教団に加盟しないのですか？ みんな入っているというのに。

遠山牧師 裕造さん。国家が信仰の問題に介入することは、いけないことなのです。わたしは教団をつくることに反対していません。国がそれを強制することに不安を覚えているのです。

役員 わしらには、小難しいことは分かりませんが、お国が決めたことで、時流に逆らうことはよくないと思うんですがね。こんなことで、わしらにもしものことがあったら、どんな責任を取ってくれるんですか？

遠山牧師 皆さん、分かってください。今、日本の国は間違った方向に進んでいます。天皇陛下は神様で、その命令には絶対従うように教えられています。しかし、天皇陛下は、一人の人間にすぎません。まことの神様は、わたしたちが信じているイエス様だけです。宗教団体法は、わたしたちの信仰の自由を奪い、天皇陛下の命令に絶対服従させるためのものなのです。だまされてはいけません。

裕造 そうですか。確かにわしらは今までイエス様を神様として礼拝してきた。だが日本臣民としては、天皇陛下に絶対忠誠を尽くさなきゃならん。とりわけ、こういうご時世だ。ヘタに事を荒立てて教会を守れなくなるより、ここは一つ、お上の言うことに従ったほうが賢明だと思うんですがね。

ナレーション 古川さんの言葉に、鈴木さんを除いたほかの役員は皆うなずいていました。そんなある日、古川さんの家を、村のお巡りさんが訪ねてきました。

巡査 こんにちは。古川さん、いるかね。

民子 はあい。(奥から出てくる)あら、駐在さん。今日は何ですか？

巡査 裕造さん、いるかね？

裕造 ああ、こんにちは。和夫のことではいつもお世話になっています。

巡査 あんた、あの教会の役員をなさっておられるが、あの教会の遠山牧師はけしからんね。国策に背いて、勝手に礼拝を行っている。いやなに、昨日警視庁のほうからね、特高の刑事さんがこちらに向かったそうだよ。あんたもあまりかわり合いにならんほうがいいんじゃないかな。あの牧師もいずれブタ箱行きだからね。

民子 わたしもそう思うよ、あんた。何しろ、「天皇陛下はただの人間だ」なんて言っってはばからないんだからね。

裕造 で、手入れはいつなんですか？

巡査 それは言えない。だが、あんたとの仲だ。1、2週間のうちだと言っておこう。

民子 駐在さん、ありがとうございます。ねえ、あんた。駐在さんにあれを差し上げておきましょうか。

裕造 そうだな。持っておいで。(少し間)これは今年取れた新米でね。少しだけど召し上がってください。

巡查 そうかい。いつもすまないねえ。じゃあ、くれぐれもな。

裕造 だから言わんこっちゃないんだ。あの頑固牧師。人がせっかく注意してもちっとも聞こうとしないんだから。おい、ほかの教会員を巻き添えにしちゃならねえぞ。秘密だって言って知らせておけ。ああ、あの鈴木っていうのには知らせなくていいぞ。

ナレーション 次の日曜日のことでした。

ルツ子 今日はだれも来ないわね。どうしたのでしょうか。

鈴木 本当ですね。何があったのでしょうか。

遠山牧師 (遠くから)さあ、礼拝を始めますよー。

(効果音) (オルガンの賛美歌)

遠山牧師 今日は神様のご支配について学びましょう。「ヤコブよ、なんじ何故に我が道はエホバに隠れたりと言うや。イスラエルよ、なんじ何故に我が訴えは我が神の前を通り過ぎされりと語るや。なんじ知らざるか聞かざるか、エホバはとこしえの神、地の果ての創造者にして、うみたもうことなく、また疲れたもうことなく、そのさときこと計り難し。疲れたる者には力を与え、勢いなき者には強きを増し加えたもう。…」

神様は、わたしたちをつくれ、一人一人を愛してくださいました。この地の上に生きる者として、だれ一人として、この創造者の恵みと哀れみを、蒙らない者はいないのです。わたしたち人間はすべて、神の前に感謝と畏れ<sup>おそ</sup>をもって、この唯一まことの神のみを拝さなければならないのです。

ナレーション その時でした。

刑事 そこまで！ 遠山牧師、ちょっと降りてこい。聞きたいことがある。貴様はこの間、「天皇陛下も一人の人間だ」と言ったそうだな。

遠山牧師 肺。わたしたちの信じている神様は、わたしたち人間を始め、すべてのものを創造されました。

刑事 天皇陛下も、その哀れみを受けて生きている、と言うんだな？

遠山牧師 はい。

刑事 分かった。その話をもう少し詳しく聞きたい。ちょっと警察まで来てもらおうか。

遠山牧師 分かりました。では、ちょっと支度をしてまいります。

刑事 いい。そのまま来い。

遠山牧師 でも、家族に話すことが…。

刑事 余計なことを言うんじゃない。来い！ おい、こいつを連れていけ。

忍 お父さん！

遠山 分かった。心配しなくてもいいよ、忍。すぐ帰ってくるからね。母さん、後を頼んだ

よ。

ナレーション こうして父は、警察の手に引き立てられていきました。

忍 どういうことなの、お母さん？

ルツ子 あなたには、まだ難しいかもしれないけど、大事なことから話しておくわね。今、日本はお隣の中国と戦争をしているの。始めは、勝った勝ったでよかったのだけれど、だんだん形勢が不利になってね。今、アメリカやイギリスなどともとても危険な関係になってるの。だから何とか国民を一つにまとめて、天皇陛下を神にして、その命令にすべて従わせようとしているの。そして、それに反対するような考えが出てきたら、どしどし取り締まれるように、いろんな法律を作ってるの。3年前の国家総動員法、今年改正されて一段と厳しくなった治安維持法、そしてこの間の宗教団体法。お父さんは、「国家の言うなりになるような教団は嫌だ」と言って加盟なさないし、「唯一の聖書の神だけがまことの神だ」とおっしゃってるから、にらまれてしまったのね。

忍 お父さん、すぐ帰ってくるかしら。

ルツ子 ムリでしょう。何しろ、取り調べのために連れていったのじゃなくて、見せしめのために連れていったのでしょから。でもどうして教会の役員会で話したことを、警察の人が知っていたのかしらね。

ナレーション わたしは、子供心に、国家というものが、何か得体の知れない巨大な魔物のように思えました。

忍モノローグ でも、わたしには、まことの神様が、イエス様がついていらっしやる。

ナレーション そう思うとわたしは、何者にも負けない勇気がわいてくるような気がした。でも、父の連行が、教会の、しかも信頼していた古川のおじさんの告げ口によるとは、その時には夢にも思いませんでした。

(音楽) (不安な感じ)

< 後編 >

ナレーション 父が警察に連行されたニュースは、村中にあっと言う間に広まりました。翌日の月曜日、学校に行くと。

教師 お前、学校でやたらと教会の話をするのはやめろ。お前の父親は、国策に背く非国民なんだ。みんなも遠山と親しくしてはダメだぞ。悪い感化を受けるからな。いいな。

ナレーション その日から、わたしたち親子には、村八分同様のつらい毎日が始まりました。母は、「わたしたちは決して間違ったことをしてはいない。みんなに正しい神様の教えを語り、正しい道に導くのがわたしの使命だ」といつも出かける時に話し、祈ってくれました。

1941年(昭和16年)12月8日、ついに日本はアメリカと戦争を始めました。わ

たしが一番つらかったのは昼休みでした。父の逮捕で経済的に困り、野菜、お米などを差し入れてくださる人もハタと途絶えて、みんなおいしそうに食べるお弁当を横目で見ながら、我慢をしなければならなかったからです。

友達 1 遠山、お前、昼食わないのか？ ヤソは戦争になったら昼飯を食っちゃいけないことになってんのか？

友達 2 忍さんち、お父さん刑務所でしょう？ お金がなくて食べ物買えないのよね？ かわいそうだけど自業自得ね。

ナレーション そんな中で、母とわたしは、全能の神様がおられるから、きっとこの苦しみから救い出してくださると信じて、耐えていました。

(効果音) (以下のナレーションのバックに、砲撃音、飛行機の爆音、機銃音など)

ナレーション 初めのころこそ勝ち進んでいた日本も、1942年のミッドウエー海戦の大敗北を境に、アメリカの圧倒的な物量の前に次第に敗色を濃くし、占領地は、膨大な戦死者を出しながら、次々に奪回されました。1945年(昭和20年)に入ると、焦土と化した日本の運命は風前の灯でした。その時わたしは15歳、女学校3年になっていました。

教会は、父の投獄以来、来る人もほとんどいなくなり、寂れる一方でした。そんな中で、鈴木さんだけがよく助けてくれました。

鈴木 奥さん。これ、少しばかりだけ食べてください。さつま芋です。隣村で買ったのです。少しでも何か食べなければ、で、先生から何か連絡はありますか？

ルツ子 いいえ、何にも…。

ナレーション 父は、詳しく取り調べるため、東京に連行されていたのです。

鈴木 そうですか…。先生が逮捕されてもう3年ですね。獄中でどんなにおつらいことか…。

奥さん、実は今日はお別れに参りました。わたしにもこのたび召集令状が来ました、行かなければなりません。先生がお帰りになるまでお助けしたかったのですが。

ルツ子 そうですか。とうとうあなたにも…。

ナレーション その時でした。

村の男 こんにちは。奥さんいるかい？

ルツ子 はい、何でしょう？

村の男 あんただろう、うちの畑から芋を盗んだのは？

ルツ子 いえ、わたしは…。

村の男 ウソつけ。ここにある芋は何だ？ 盗むところをちゃんと見ていた人がいるんだぞ。

ルツ子 それは何かの間違いです。これは教会の鈴木さんが…。

村の男 何言ってるんだい。返してもらうよ。



になったこともあったが、それはそれなりにお返しをしたつもりだよ。だが、今、お宅にあげるカボチャはないんだよ。

忍 でも、あんなにたくさん積んであるではありませんか。お題は後で必ず払います。母はこのところ何も食べていないんです。

裕造 今、我が国は非常時なんだ。兵隊さんに送ってあげなければならない。それを、敵性宗教であるキリスト教なんか信じて、天子様に背き、天子様よりイエス・キリストのほうが偉いなんてほざいているような人間には、ひとかけらだってやれないよ。

忍 でも、古川さんは、4年前まではイエス様に従っていたではありませんか。どうしてそんなに変わってしまったのですか？

裕造 時の流れよ。このご時世に、キリスト教じゃ生きていけないからね。

忍 それは違います、古川さん。イエス様が本当の神様なんです。それは今に分かります。

裕造 そうかい。あんたらはアメリカかぶれだから、きっとアメリカが勝つと思ってるんだろうね。しかし日本は神国だ。最後には神風が吹いて勝つのさ。さあ帰った帰った。

ナレーション わたしはとても悔しい思いで帰途に就きました。

忍モノローグ なぜわたしたちがこんな思いをしなければならないの？ わたしたちが間違っているの？ いいえ、父も母もイエス様に従って歩むのが一番正しいと言っている。じゃあどうしてこんなに苦しい思いをしなければならないの？ 天皇陛下が神様だって言うけど、陛下はこんな苦しみを知っているのかしら？

ナレーション 母は1か月後、とうとう栄養失調と風邪から肺炎にかかってしまいました。

忍 お母さん、お母さん、死んじやいや！ お母さん！

ルツ子 忍、決して人を恨んではいけないわよ。みんなは何をしているか知らずにいるんだからね。時代が変わったら、村の人を愛して、仕えるのよ。お母さん、天国であなたのことを見守ってるから。もしお父様が生きて帰られたら、「天国でお待ちしてます」って伝えてね。

ナレーション こう言い残して、母は息を引き取りました。39歳の若さでした。

それから数ヶ月下 1945年8月15日、ポツダム宣言を受諾した日本は、戦争に負けました。

村人1 おい、天子様が人間宣言されたんだとよ。

村人2 そうだろう。おれは、初めから現人神<sup>あらひとがみ</sup>なんて信じていなかったよ。

村人1 ウソつけ。お前だって毎日宮城遥拝していたし、ご真影に頭を下げていたじゃないか。

村人2 そりゃ、そうでもしなきゃ牢屋にぶち込まれてしまうじゃないか。

村人1 それもそうだな。(2人、笑う)

ナレーション 村の人たちのそんな話を聞くにつけ、「何ていい加減な人たちなんだろう」と、わたしの心は煮え繰り返るようでした。信仰を守って投獄された父や、死んだ母のことを思うと、たまらなかったのです。

あれは敗戦から1週間ほどたった、ある日のことでした。

遠山牧師 忍、ただいま。

忍 (ぼう然として父を見つめる)

遠山牧師 お母さんは、元気か？

忍 お父さん...。(泣き崩れる)

ナレーション 父が帰ってきたのです。4年近くもの間、投獄されていた父は、骨と皮のようになり、すっかり髪の毛が白くなっていました。わたしは、父に今まであった出来事を話しました。

遠山牧師 ...そうか。母さんは天に召されたか。お前も苦労したんだな。母さんがいないのによくやった。イエス様は真実だ。お前と教会を守ってくださった。母さんも今はイエス様の元で安らかだろう。残されたわたしたちがその分も頑張らなければね。もうお前に苦労はさせないよ。

そうだ、紹介しよう。こちらの方は、わたしの神学校時代の恩師、スミス先生のご子息、ハリスさんだ。今、GHQの仕事で日本に来ておられる。偶然にお会いして、お連れしたんだ。

ハリス 忍さん、ですね？ 今まで独りで大変だったでしょう。もう大丈夫ですよ。お父さんと一緒に、またイエス様のために働きましょう。

ナレーション こうして、新しい平和な時代が再びやってきました。わたしはその後、大学を出ると、はりすさんと一緒に父を助けて、今まで福音の宣教にすべてをささげてきました。イエス・キリストの福音、それは神の愛と赦しのメッセージです。そのことを思う度に、50年近くたった今も忘れられない1つの出来事をお話して、この物語を終えたいと思います。

それは、あの古川さん夫婦のことでした。わたしと再会して間もなく、父はわたしを連れて古川さんのところを訪ねたのです。

民子 あなた、大変よ。教会の先生が帰ってきたんだってよ。

裕造 うん、聞いたよ。困ったことになったな。何しろずいぶんとひどい仕打ちをしたからな。まさか日本が負けるなんて思わなかったから、特高に先生のこと、みんなしゃべっちゃったし。困っているのを知っていて、何もしてやらなかった。それどころか、1つのカボチャさえ分けてやらなかった。奥さん、栄養失調になっていて、それがもとで死んじゃったんだ。おれは、何ということをしたんだ。

民子 それに、何だかGHQで戦争犯罪人を調べるために来たというアメリカ人も一緒だというし。わたしら、刑務所に入れられたでしょう。

(効果音) (引き戸の開く音)

遠山牧師　ごめんください。古川さんいらっしゃいますか。  
ごめんください。ごめんください。裕造さんはお留守ですか？

裕造　ああ、遠山先生だ。ついに来た。もうダメだ！

遠山牧師　古川さん。ごぶさたしておりました。お変わりありませんか？　奥様、お元気ですか？

裕造　先生、何しに来なされた。今はあんたの天下だ。アメリカ軍もついているしね。わしのこと訴えるがいい。長年の恨みを晴らすがいい。もうわしらは負け犬なんだ。お宅にはずいぶんひどいことをしてきたからね。打つなりけるなり、存分にしてくれ。

遠山牧師　裕造さん。わたしはあなたを責めるために来たのではないのです。それは、わたしも忍から聞いた時は驚きました。今まで熱心だったあなたが、手のひらを返すように教会を離れてしまった。また、警察で、あなたが、わたしの事であることないことを話したことも知らされました。わたしも始めはとても失望しました。しかし、その時気がついたんです。人間は本当に弱いものなんだってね。  
わたしたちは、自分の身を守るために、たとえ内心では”天皇は神だ“なんて思わなくても、表面上はそう振る舞い、人にも強制してきました。しかし、そんな自分中心のわたしたちを赦し、イエス様は十字架にかけられ、死んでくださったのですよ。拘留所の中で、独り聖書を読んで祈っているうち、わたしは自分が本当に人を赦せない、愛のない人間であることが分かりました。そして、こんな者をも愛し、命を捨ててくださったイエス様の十字架が、はっきりとこの身に焼きつけられた気がしたんです。その時に初めてわたしは、イエス様に在って、あなたがたを赦すことができたのです。忍の話によると、わたしの妻も、死の床で、あなたを恨んではいけない、わたしは赦していると言って、召されていったそうです。  
古川さん、もう一度立ち上がって教会を立て直しましょう。神様の前に悔い改めて、弱い人を愛し助けて、熱心に伝道しましょう。長い間、天皇は神であると教えられ、苦しめられてきた多くの人々に、今こそ、まことの神、愛の神様のことを伝えるのですよ。

裕造　せ、先生…。

民子　遠山先生…。(2人、号泣)

ナレーション　あの時に、わたし自身も本当に変えられたのかもしれませんが。気がついたら、古川さんのことも、冷たい仕打ちをした村の人たちのことも、心から赦せるようになっていたのですから。

忍モノローグ　これが十字架の、神様の力なんだ…。

ナレーション　見えざるお方を畏れる<sup>おそ</sup>ような思いで、思わずそう叫んだあの時のことを、わたしはまるで昨日のこのように思い起こします。あの出来事が、今までの、そしてこ

れからも、わたしの生きる支えなのです。

< 完 >